

## はじめに

2000年度・2001年度

学校臨床総合教育研究センター長 佐藤 一子

学校臨床総合教育研究センターの2001年度年報が刊行されました。客員教授、協力研究員をはじめ、当センターの運営と研究活動にご協力いただきました先生方に心より御礼申し上げます。

当センターでは、2000年度から2002年度の3年間にわたり「[学力低下]の実態解明と改善方策に関する実践的研究」プロジェクトにとりくんできました。2001年度には協力研究員34名を委嘱し、3回の研究会を開催しました。本年報には2001年度の研究活動の成果と記録をまとめて掲載しました。

特に、2001年12月には東京大学教育学部附属中等教育学校の新設校舎のホールで公開のシンポジウムを開催し、100名以上の方々にご参加をいただきました。学力問題は、現代の教育政策、学校教育問題の中心的な課題となっており、そのとらえかた、及び学校における教育実践のありかたをめぐる社会的にも大きな論争となっています。このシンポジウムにおいても、登壇者の市川伸一教授(当センター)、加藤幸次教授(上智大学)、藤澤伸介教授(跡見学園女子大学)、榎府暢子教諭(東京大学教育学部附属中等教育学校)から、大変鋭い問題提起があり、会場からも活発なご意見をいただきました。プロジェクト研究の課題を有意義にほりさげることができたと思います。

当センターでは、客員研究員を海外から招聘し、国際的な研究交流を推進することを課題のひとつとしています。2001年度にはジョージア大学のリチャード・ヘイズ教授(2001年5月～8月、2002年1月～)、雲南省社会科学院の喬亨瑞教授(2002年1月～)のお二人をお招きし、研究協力をいただいています。また国内の客員教授として、藤澤伸介教授(跡見学園女子大学)、伊藤研一教授(文教大学)にご協力をいただきまし

た。プロジェクト研究を推進するうえで、国内外の専門家を招聘して研究にご協力いただくことは大変重要な意味をもっています。今後ともこの制度の活用により、さらに活発な交流がおこなわれることを期待しています。

2001年度は、東京大学教育学部附属中等教育学校と当センターとの日常的な研究・教育交流についても、新たな試みをおこないました。専任教授亀口憲治教授を中心に附属学校のほっと・ルームの運営に協力するとともに、学習相談に関しても市川伸一教授が定期的な活動を附属学校でおこなってきました。また、研究員として当センターに派遣されている橋本涉教諭も独自の研究にとりくみました。附属学校と教育学部の研究・教育活動における連携が模索されている現在、当センターが学校臨床の視点から組織的に附属学校との連携を発展させていくことは、当センターの課題のひとつであると考えます。

大学の独立法人化の動向のもとで、当センターの位置づけや機能をめぐって今後新たな対応をせまられる問題も生じると思います。しかし、当センターが、学校をめぐる臨床的な研究を軸として、広く現場の関係機関のご協力をえながら研究をおこない、対外的にその成果を発信していくという基本的な役割はますます重要になると考えられます。当センターの発足にご尽力され、2001年度で定年退官された近藤邦夫教授の当初の運営理念を受け継ぎ、これからさらに変化していくであろう学校、大学、社会のなかで、臨床的な教育学研究を地道に継続し、東京大学教育学部・大学院教育学研究科の研究活動の広がりにも寄与していきたいと考えます。

客員教授、協力研究員をはじめ関係者の方々に厚く御礼申し上げますとともに、今後のいっそうのご協力をお願い申し上げます。